



NEC ネットエスアイ様

URBAN PLAN PRESS

働き場改革

WORKS・事例紹介

半蔵門総合法律事務所 / Nolook
N社 / NEC ネットエスアイ

PICK UP

松下産業 STONES 堂島
URBAN PLAN OFFICE

Vo.005 TAKE FREE

半蔵門総合法律事務所 / YOKOHAMA



オフィスの持つ役割といえば、一般的な執務に接客、業種によっては開発や研究など。最近では情報発信などのメディア的機能やミーティング機能も求められるようになってきた。それともう一つ、見逃せないのが「信頼」の醸造という役割だ。企業向けの法律バックアップから一般向け法律相談、コンサルまで幅広いリーガルサービスを提供する半蔵門総合法律事務所。2020年6月に移転・開設した新オフィスのコンセプトにも「信頼」が挙げられている。2003年に4人の弁護士が共同で立ち上げた同事務所。設立から20年近くが経過した現在では、30名弱の弁護士と約15名のスタッフを擁するまでになった。設立時から入居してきたオフィスは築古ビルの3フロア4室。増員とともに増床を重ねてきたが使い勝手の悪さはいかんともし難く、移転による増床と1フロアへの集約・効率化が求められていた。新オフィスは旧オフィスから徒歩10分ほど。「半蔵門」にこだわったわけではないというが、奇しくも同じエリア内の物件が確保できた。2012年竣工のビルの4階、230坪ほどの新オフィスでは、およそ半分を来客用スペースに割いている。6室設けた来客用会議室は完全防音。物理的な遮音に加え、話し声と同じ周波数の微弱な音を流して音漏れを防ぐサウンドマスキングも導入した。会議室と執務スペースの導線

も完全に分離され、情報セキュリティも万全だ。執務室は移転前の4室に合わせて4つの区画に分け、それぞれにスタッフの席と所属弁護士の席を設けてある。移転前に比べスタッフ、弁護士の席ともにスペースが拡大し執務しやすく、また4つのグループを1フロアにまとめたことで意思疎通が密になり、協業もスムーズに進むようになった。内装は重厚感のある木目調を多用。木材に木材という一見しつこくなりそうな合わせながら、木材の種類や色合いに変化をつけることで単調さを防いでいる。落ち着いたグレー系の基調色も木目にのせたことで冷たさを感じさせることがなく、引き締まり感と暖かみとの両立に貢献している。適度な毛足の絨毯や重量感のあるファニチャーと相まって、雰囲気はホテルのクラブフロア。上質さとともに、法律を扱う業務の「ゆるぎなさ」や「確かさ」を演出しているかのようだ。「私たちの業務は、モノを造るとか商品売るといったこととは違い、そのサービスの質が理解されにくいんです」と話すのは、同事務所の岩田拓朗弁護士。「我々が提供するリーガルサービスの品質の高さを、依頼者はなかなか判断できません。信頼できる事務所か否か。オフィスは私たちにとって、依頼者に対するアピールの一つでもあるんです。」と続ける。「仕事できちんと結果をだすのは大

前提。でも法律事務所はそれを声高に宣伝できませんから、それだけでは信頼感の醸造は難しい。オフィスは依頼者に安心感を与えるツールの1つとなる。」のだという。オフィスが構築した信頼感は、リクルーティングにも効果を発揮しつつある。岩田氏は「弁護士もスタッフも、優秀な人材が集まるようになりました。新しいオフィスに移転してからは、内定辞退がほとんどなくなりました。」と成果を話す。オフィスが信頼感を与え、その信頼感が企業を成長させる。そんな好循環が見えてくる。



岩田拓朗弁護士

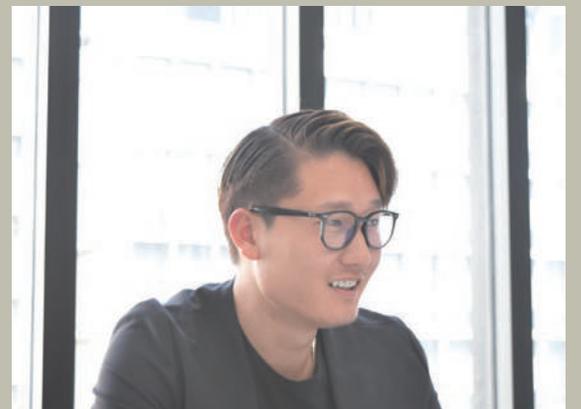
Nolook / TOKYO



SNSを活用したマーケティングやPR業務、タレントマネジメント、不動産投資コンサルなど多角的に展開するNolook。最近では2020年に立ち上げたスポーツウェアブランド「BARZAGLI」のマスクが話題となった。「どんな仕事でも、おしゃれにかっこよくこなしてほしい」。そのオフィスには、代表・平海諒氏のそんな思いが込められている。現オフィスが開設されたのは2021年2月。以前のオフィスはビルの2フロアに分かれた合計30坪ほど。従業員がひしめき、会議や打ち合わせは近所の喫茶店を利用していた。平海氏も不便を認識してはいたが、早急な移転の必要は感じていなかったという。そこに直撃した、マスクの大ヒット。梱包や発送といった社内作業が急増し、移転を決意するとすぐ物件をさがしはじめた。港区三田から移転先を選んだのは赤坂。外堀通りに面したビルのワンフロア、50坪を確保した。エレベーターを降りるとエントランススペースが広がり、来客用の会議室を挟んで奥に執務スペース、その脇にはちょっとした息抜きやミーティングができるバーカウンターが配置されている。5坪ほどのエントランススペースは白を基調としたシンプルなデザイン。天井は白塗りのスケルトンとし、空間の広がりを出している。壁には棚やハンガーラックが設えてあり、「BARZAGLI」のウェアが

並ぶ。「この空間は単なるエントランスではなく、もともと商品の展示やイベント、プレス向けの会見などができる空間としてつくったものなんです」と平海氏。様々なメディアを駆使した情報発信は同社の主要な業務の一つでもある。「いつか欲しいと思っていた」、対外的な発信力を発揮できる場が実現した。内装デザインで特徴的なのは、ガラスを多用した文字通りの透明性だ。エントランスからは執務スペース、役員室まで一望でき、どこで誰が何をやっているのかが一目瞭然。来客用の会議室からも、隣り合った執務スペースが全て見渡せる。平海氏はその理由を、「トップの仕事を見せるため」と話す。「代表や役員は1日パソコンに向かって、ときどき会議して、何をやっているかわからない。社員からそう思われてたことがあったんです」。ならば、どんな仕事をしているのか見えるようにすればいい。そう考えたのが、このガラス張りのオフィス誕生のきっかけだ。「でも段ボールの在庫とか梱包作業とか、あまり見られたくないところも見えてしまっ」と笑うが、来訪者からは好評という。「隠し立てするところが無いと、好意的に見てもらっています」。移転にあたって考慮したのは、広さと立地くらい。「移転するなら虎ノ門や赤坂」というのは、平海氏の以前からの考え。「街によって歩いている人の雰囲気も違いま

すし、特にこのあたりはおしゃれな人が多い。そういうおしゃれさやかっこよさを、社員に身に付けてほしいんです」。社員に向けた「啓発」は、オフィスの内装にも及んでいる。壁や床の色合い、テクスチャ、そこに置かれるファニチャー類などはほとんど平海氏が選定。その的確さと判断の速さには内装デザイナーも一目置く。おしゃれでかっこいいオフィスは、確かに社員を変えつつある。以前のオフィスで目にしたようなサンダル履きや着崩しは無くなり、むしろ積極的におしゃれなものを取り入れるようになった。入社希望者も増え、オフィスは早くも手狭になりつつある。



平海代表取締役社長

N社 / OSAKA



オフィスは、そこで働く人のためにある。当たり前のことだが、実はそう言い切れるオフィスは多くはない。スキンケア、メイクアップ、ヘアケア等の化粧品用原料をはじめ、医薬品原料、電子材料や高機能樹脂などにも使用される工業用原料など幅広い分野で事業を展開しているファインケミカルメーカー・N社は、1918年の創業。1974年に竣工した本社ビルは約45年が経過し、オフィスは時代に取り残された感が否めなかった。創業100年を契機として計画されたオフィスリニューアルで目指したのは、「社員の満足度向上」だ。リニューアル計画が動き出したのは2019年3月。まずはオフィス改革委員会を立ち上げ、本社の全社員にアンケートを実施した。委員会で議論を重ねるなか、提起されたのが社員の働きやすさと社員間のコミュニケーション向上だ。同時にセキュリティやシステム環境の整備、モチベーションの向上も目指し、最新のオフィスを構築することとなった。リニューアルの対象となったオフィスフロアは9階と10階。9階にはレセプション機能を集約し、来客を迎える環境の整備に力点が置かれた。社員用とは別に来客用の導線を確保してセキュリティにも配慮するとともに、もてなしの空間として独立性を持たせている。来客の目に触れるエレベーターホールやエントランス、会議室

には木目を基調とした落ち着いた色調で、壁にタイルを張るなど重厚な雰囲気でも高級感を醸している。廊下はガラス壁を採用して圧迫感を抑えた、ワンランク上のおしゃれな空間。会議室の様子も一目で分かる。一方の10階は機能性を重視。室内デザインも9階の重厚さとは対照的に、白を基調とした明るい色合いでまとめられている。会議室などを9階に集中させたことで1.5倍に広がったスペースは、そのまま執務のために充てられた。そこでまず考慮されたのが、セクション間のゆるやかな結束だ。約410㎡の10階オフィスには現在7セクション計約35人が執務し、将来的には50人までの増員を想定している。ところが以前は各セクションのエリア間が狭く、通行にも気がつかうほど。そこでオフィス内の動線を見直し、気兼ねなく通行ができるスペースを確保、かつセクションごとの業務効率も考えた配置とした。各セクションの間にはパーティションなどは設けず、キャビネットなどの什器も壁沿いに配した開放的な単一空間としたことで、コミュニケーションにも配慮したオフィスが誕生した。個人のデスクの機能強化にも工夫がされている。両袖机を廃し、利用頻度の低い事務用品は新たに設けたストレージ室にまとめて収納。さらに整理・整頓の社内活動を毎週実施し、紙書類も整理し最小限にお

さめるよう努めた。こうした取り組みは「あくまで働きやすさの向上のため」と委員の一人は語る。「執務空間を拡大するための省スペース化とか、ペーパーレス化といった点は重視せず、スペースを広げるのはあくまで働きやすい場をつくるため。スペースの拡大が目的になっては本末転倒です」。働きやすさへの取り組みは、実はオフィスの改装だけではない。リフレッシュのための機能として設けたカフェルームはWi-fi環境も整え、ゆっくり食事や休憩ができると評判も上々だ。さらに空調設備の更新や無線LANの整備、電話システムの更新など、インフラの構築にも力を注いだ。100年にわたって紡がれてきたN社の歴史。社員の満足があってこそだろう。



高田総務部長（右）、川畑氏（左）

NEC ネットズエスアイ / KAWASAKI



PCさえあれば、いつでも、どこでも仕事ができる社会。コロナ禍で急速に進んだ働き方の変化も、ICTインフラの整備という下地がなければ実現不可能だったにちがいない。通信網の構築を通じて働く環境づくりに貢献してきたNEC ネットズエスアイ。そのオフィスには、「働き方改革」のヒントが詰まっている。2019年5月から順次開設された小杉オフィスは武蔵小杉駅から徒歩のビル内。4フロアに分散しており、3階がショールームを兼ねた「見せるオフィス」、4階と8階を執務スペースとし、6階には同社が展開するサテライトオフィス「アクティビティベース」を設置した。なかでも新機能として期待が寄せられているのが3階フロア。ICTとネットワークを軸に働く場を改革し、知識創造と効率性を高める。そんな事業を展開する同社が目指す働き方、働く場を具現化したオフィスだ。フロアは約80坪。エントランスを入るとミーティングブースを配した空間が広がる。ロビーのような雰囲気と機能だが、将来的には取り扱う製品やサービスの展示やデモンストレーションを行う構想もあるという。奥は仕切られた会議室とパントリーで、右手が執務エリアとなる。約60席を確保した執務エリアは、白とグレーが基調の、落ち着きがありながらも明るい内装。新しい試みとして、クライアントに

対するソリューション紹介スペースも兼ねている。ビルオートメーションシステムの使用感と、オフィスで働く社員の息遣いを直に感じられるようなゾーニングとした。基本はフリーアドレスで、一部設計業務のみが固定席。視界を遮るパーティションなどは設けず、室内が一目で見渡せる。天井も設置した通信機器や配線などが見えるよう、あえてスケルトン。「見せるオフィス」というコンセプト通りのづくりだ。いずれは空調・照明・人の流れなどを自動で制御・分析する自社のビルオートメーションシステムなども導入し、ショールームとしての役割を進化させていきたいという。緊急事態宣言では社員の7割以上が在宅または「アクティビティベース」などでテレワークを実施し、出社は残りの3割ほどとなった。だがコロナ禍以前から取り組んでいた働き方改革が実を結び、テレワークへの移行は非常にスムーズに進んだ。総務部統括マネージャーの渡辺明彦氏は、「自前の『アクティビティベース』の設置を進めるなど、もともと自社の働き方改革も積極的に行っていました。テレワークでも生産性やコミュニケーションが低下せず、問題なく業務できている点で他社をリードしている実感があります」と話す。「アクティビティベース」はコロナ禍直前、武蔵小杉をはじめ横浜、立川、浦和、柏、船橋、北千住など7施設をオープンし、分散勤務

を採り入れていた。クライアントに新しい働き方を提案し、自由に働ける環境をつくるのは同社の重要な業務の一つでもある。その有効性を自ら実践し証明したかたちだ。働き方改革というと「時間や場所に捉われず働ける環境の構築」を指すことが多いが、同社では「ウェルビーイング＝個人も組織も良好であること」という概念を重視する。働き方改革とは、良好な状態を維持しつつさらに良好な状態にしていくことが目的であって、環境の構築はその手段にすぎない。NEC ネットズエスアイでは、これからもICTツール、クラウドツールを活用したコミュニケーションを進化させ続けていくという。「良好」の追求こそが改革なのであれば、働き方改革に完成はないのかもしれない。



総務部 渡辺統括マネージャー

社名：NEC ネットズエスアイ株式会社

住所：神奈川県川崎市中原区小杉町1-403-60 小杉ビルディング

プロジェクト：移転

HP：<https://www.nesic.co.jp/>

ショールームを持つオフィス 松下産業 大阪ショールーム STONES 堂島



現場監督のお気に入りでもある石のアーチは沖縄の琉球石。アーチ型に石をくり抜き天井から吊っています。ここを通る時はいつも洞窟に入るような非日常の気分になります。メインのオフィスには、天然石を3枚に分割した特注デスク。モノトーンのシンプルな空間に、天然ならではの石目柄が映えます。石材企業様ならではのオフィスです。

2020年8月に竣工した松下産業様の大阪ショールーム「STONES 堂島」。天然の石で彩られた空間は、一歩足を踏み入れた時から独特の温度感に包まれます。静謐で凛とした空気がとても印象的です。松下産業様は、世界各地にネットワークを持つ石材の総合プロデュース企業です。「STONES 堂島」は、既存のオフィスにショールーム機能を追加する改修で生まれました。飯島直樹デザイン室が設計・デザインし、アーバンプランが施工させていただきました。昨年のコロナ禍の影響もあり工期が遅れに遅れ、半年かかって竣工したショールームです。多彩な石材の魅力、特に天然素材であるが故のアンバランスな側面を活かし、目で見て肌で感じ体感してもらう空間をコンセプトとしました。重量のある石材を使うため、施工の際には耐荷重や強度などを考え抜き、工夫しながら施工にのぞみました。左手奥に見える石製の吊り下げ式カウンターは、この空間のトピック。石が持つ重量感や存在感に逆らい、無限の可能性を与えてくれる素材であることを印象づけています。



石の丸みに沿って現場加工した小口の見切り。細部にデザイナーのこだわりが反映されています。



大阪事務所、移転します！！



大阪営業所を立ち上げ2年が経ち、この度新大阪から梅田へ移転します！なんと！阪急梅田駅改札目の前の好立地！ぜひライブオフィスに遊びに来てください！

CGのご依頼お待ちしております



URBAN PLAN OFFICE



東京本社
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 34F
TEL 03-5909-0515
FAX 03-5909-0516



大阪営業所
大阪府大阪市北区芝田 1-1-4
阪急ターミナルビル 9F
TEL 06-6373-2340
FAX 06-6373-2341



名古屋営業所
愛知県名古屋市中村区名駅 4-5-28
桜通豊田ビル 5F
TEL 052-589-9981
FAX 052-589-9982



横浜営業所
神奈川県横浜市中区本町 6-52
本町アンバービル 8F
TEL 045-226-3566
FAX 045-226-3567



ベトナム設計室
Room 5D, 5 Floor, Ricco Building, 363
Nguyen Huu Tho Street, Khue Trung
District, Cam Le Town, Danang City,
Viet Nam

